

死にかた 生きた きかた ①

「おあじわい」



僧侶ドクター
友久 久雄

お座を立てる

私は、法隆寺と一緒に日本で初めて世界遺産に登録された白鷺城^{しらさぎじょう}で有名な兵庫県姫路市で生まれました。

母は熱心な浄土真宗の信者で、2カ月に一度、「お座を立てる」と言つて、布教使の先生を招いて、自分の家で講演会を開いていました。そして先生の話が終わった後も、有志

とのほうが忙しく、徐々にその会にも出なくなっていました。

人はなぜ宗教を求めるのでしょうか。神や仏など人間を超えた聖なるものの存在を信じ、それによって悩みを解決し、幸せを求めようとしているのでしょうか。

悩みの問題といえば、究極的には「自らの死」の問題を解決することです。このことを「死なぬ命をいただく」と私は表現しています。

この世に生を受けた限り、死なぬ者はありません。諸行無常^{しよぎょうむじょう}です。それでは、死なぬ命をいただくとはどういうことなのでしょう。それは生物学的な命ではなく、精神的な命です。人間を超えたもの、すなわち阿弥陀仏との出会いにより、精神的な命に出会うことが

がその場に残り、「おあじわい」をしましうと、自分たちの体験を話し合うのが恒例でした。

その頃、幼稚園児であつた私も、その中に入ってもらつて、一人前の顔をしてわかりもしない話を聞いていました。たぶんその頃は、話を聞くよりも、その時に出るお菓子が目的だつたのだと思います。

しかし、中学生にもなると、友達と遊ぶこ

できます。これを「お出会いする」といっています。この「お出会いする」ことにより、自分を超えた命を「いただく」ことができます。この命をいただき、それを自分のものとしてしっかり噛み締めて味わうことを「おあじわい」といいます。

これは専門用語でいう「回向^{えこう}」のことでもあります。阿弥陀さまの徳を、阿弥陀さまがわれわれに振り向けてくださる、すなわち、阿弥陀さまと「お出会い」することにより、その徳を身体^{からだ}で「いただき」、そのいただいた味を「おあじわい」として自分のものとする。その結果、今までの自分の心がひるがえされることを「回心^{えしん}」といいます。

すなわち心の向きがくると回る。今まで、全て自分中心で、自分が決めなければならなかった世界が、自分が決めるのではなく阿弥陀

陀さまに「おまかせ」できる世界に変わるのです。

自分の命も含めて、全てが(阿弥陀さまに)おまかせできる世界に生かされるようになるのです。これを「死なぬ命をいただく」と表現しています。

よかった よかった

青木 鈴木さん、いただかれたということですが、おあじわいはどうでしたか。

鈴木 はい……。私の場合、お仏壇の前でお念仏を称となえていましたら、仏壇の奥から「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」というお念仏の声が聞こえてくるように感じまして、不思議なことがあるものだなあと思っていました。すると、その声がさらに私のまわりから聞こえてくるよ

このような座談会における「おあじわい」が、2カ月に一度、母が亡くなるまで続けられました。

母が往生したのは、昭和63(1988)年の4月で、桜が満開の頃でした。

お葬式の後、「おあじわい」の座談会が行われていた部屋にお同行(ご門徒)が集まり、母の思い出話がはじまりました。喪主である私は、その場を離れることもできず、皆さんの話に耳を傾けていました。

するとそのうちの一人が、突然私に向かって「お母さんは、なぜこのお座を長いあいだ続けてこられたのかご存じですか」と問いかけられました。私が答えに窮きつしていると、「あなたにお話を聞いていただきたかったからですよ。お母さんの話では、あなたが医学

うに思えて、何が何だかわからなくなっていると、こんどはそのお念仏が私の体の中に入ってきました。不思議なことがあるもんですね。

青木 そうですか。それだけですか。

鈴木 そうですね。それだけですけれど……。その後なんですが、お聖教しやうぎやうを読むと、それまでわからなかったことが、わかるようになってきて驚きました。それまで砂をかむようなお聖教の味わいが、有り難くおあじわいできるようになりました。ほんとうに有り難いことです。ほんとうに、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……。

青木 よかった、よかった。私の場合と状況はちよつと違いますが、おあじわいは一緒ですね。よかった、よかった。

部に入られた頃から、お母さんのおっしゃることを聞かなくなれたそうです。お母さんは勉強よりも、お話を聞いてほしいと思っておられたので、反発するあなたに直接口言うのではなく、自分が生きている間は、このお座をずっと続けよう。そうすれば、いつかはきつと気づいてくれるかもしれない、と思っておられたようですよ」と聞かされたのです。黙っている私に、また別のお同行が「親というものは有り難いものですね。子どものためには自分を犠牲にしても、何をしなければならぬかをよく知って行動するものですね」と言われました。

その時の私は、ただ黙ってうなづくだけでしたが、その後の聴聞は今までは違うものとなりました。